平田先生の思い出二、三

三木紀人

旧世代の者が平田先生を語る場合、例の浅間山荘事件にふれないわけにはいかない。ご多分に洩れず私も、その名中継にひかれて終日テレビの前にくぎづけとなった一人である。その日の日記によると私は前日まであった入試採点の仕事からひとまず解放され、気持を切りかえて、締切のせまる雑誌原稿にとりくまなくてはならなかったのであるが、中継のためにまったく仕事ができず少々いらだつ反面、歴史のひとこまをかいまみた思いで興奮したものである。しかし、放送史上もっとも心に残る番組として万人に支持され、長く語りつがれるそれをリアルタイムで見とおした幸運を当日まだ十分実感していなかったし、その中心的担い手と十数年後に職場で同僚となるなど、夢にも想像できなかった。

そんな関係で、十年余お付きあいしていた間、平田先生とお会いするおりに、いつも何やら劇的なときめきを覚えるのをならわしとした。同感の方も多いのではあるまいか。

残念ながら、そのような体験ができにくくなった今、お茶大を去った平田先生の印象を何かに喩えるなら、一陣の清風が吹きぬけていったような、ということになる。その印象が形成された日常的なきっかけは、毎週水曜の昼休みのいわゆる学科会議の席であった。先生は研究室が遠いためにややおくれて登場することが多かったが、いつもさわやかな声の挨拶とともに入ってこられ、室内の空気がそれで少なからずリフレッシュされるのであった。そして発せられる言葉は、雑談であれ、議事にそった意見であれ、歯切れがよく説得力に富み、ＮＨＫアナウンス室きっての論客とうたわれたという（ＢＳ放送、浅間山荘事件中継回顧番組中の解説）往年の風貌を追想させるのに十分であった。

もちろん、教育者・研究者としての平田先生について語るべきことは多いが、すでに余白があまりない。やむをえず私一個とのかかわりに即してささやかな思い出一つにふれるにとどめておく。私の妻と娘たちがイタリア旅行中にガイドとして世話をしてくれた現地の若く美しい女性をめぐってである。何かのおりにお茶大の話題になり、共通の知人として平田先生の名前が出て、雰囲気が一段となごやかになったという。その女性は留学生であった頃、平田先生に学んだことがあるらしいが、おりめただしい日本語を自在に用いて日本からの旅行者を実に喜ばせていたとも聞いた。こうしたかたちで先生の徳が地球的規模でひろがっているのだろうと思うと、心あたたまる思いひとしおである。